「倒れないものは歩けない～悩みがあるから救われる」

●ロボット博士

　2019年6月30日放送のNHK-Eテレ「こころの時代」で、ロボコンなどを提唱し、ロボット博士として有名な東京工業大学名誉教授の森正弘さんが、「ふたつをひとつに―ロボットと仏教」というテーマで出演されました（詳しくは、こちらのサイトにまとめられています）。

　ロボコンとは、高等専門学校の若い人たちに、既成概念にとらわれず、物づくりの楽鎖ちを共有してもらうロボットで、その発想力や独創力などを競うコンテストです。

　しかし、試合の勝ち負けとは別に、夢や発想、さらに、製作技術や製作課程での困難をいかにして乗り越えたか、そこに使われたアイデアの将来の開拓性や発展性、ロボコンの精神に合致しているかという観点から、最高の賞「ロボコン大賞」なども設定している大変ユニークな営みです。

　森さんは、工学の世界に身を置きながら、40歳代から禅を通して仏教を学び、仏教研究に打ち込んできました。

「ロボットを作るには人間を知らないといけない。人間の心を理解するためには、仏教ほど深く考究したものはない」と考える森さんは、仏教の根本を質すのは、「相異なり対立する二つの概念を一つに融合させる心の働き」だと言われます。

「こころの時代」では、インド哲学者の丸井浩さんが聞き手となり、森さんから印象深い言葉が次々に引き出されます。

　その一つが、「倒れないものは、歩けない」です。

　言われてみれば、人は倒れますし、だから、歩けない。人間は、歩けます。しかし、倒れることもあります。だから、歩けるんです。改めて、こんな単純な言葉にとても深いものを感じました。

●迷うから、救われる

　四足歩行の動物よりも、二足歩行の人間の倒れる可能性は、はるかに大きいのです。ところが、私たちは絶妙なバランスのもとで、歩いています。

　普段、何気なく暮らしているので、改めて、この「歩く」という出来事を考えてみることもなければ、不思議なことだなと実感することもありません。それなんだから、この言葉は、改めて、自分のモノの見方、考え方そのものに気づかせてくくれるのだと思います。

　そういえば、仏教では、迷っている人間だからこそ、その自分の姿に気づかされて、さとっていくことができる、あるいは、救われていくのだと教えます。もし、自分が迷っていないと勘違いして思い込んだら、本当は、迷っている自分の姿に気づくことができませんから、さとることもなければ、救われることもないことになります。

　仏さまの教えというのは、改めて、私たちに、普段、自分が自分の姿に気づいていないということを気づかせてくださるのでしょう。

「倒れないものは、歩けない」という言葉は、印象深いだけでなく、仏教の深いものの見方であると思います。

●相異なるものだから

　親鸞聖人は、「正信念仏偈」に、次のようにお示しです。

　　ふ／だん／ほん／のう／とく／ね／はん
　　「不断煩悩得涅槃」（煩悩を断ずれて涅槃を得るなり）

　　しょう／ち／しょう／じ／そく／ね／はん
　　「証知生死即涅槃」（生死、即ち、涅槃なりと証知せしむ）

　煩悩も生死も、人間の迷いのことをいいます。涅槃は、仏さまのおさとりであり、私たちにとっては救いのありようです。

　人間の分別都合のモノの見方では、迷いは迷い、救いは救い、それぞれ別々であり、相異なるものだと、全然関わりのないものだと、分けて考えてしまいます。そして、そのようなモノの見方に立つと、迷いをなくさないと救われない、救いは迷いを断ち切ったところにあると思い込み、そこに留まります。あとになって、違った角度からモノごトが見てくると、大切なことに気づくことができないままだった、ということになります。

　ところが、如来様の本願念仏の教えに育てられ、気づかなかったことに気づかされると、私の迷いがあればこそ、そこに仏さまのお慈悲が届いてくださっていたと思い当たります。つまり、迷いと救いは、別々でありながら、実は、ひとつのところで一緒だったと実感するのです。

「倒れる」からこそ、「歩ける」という言葉の根っこにある、「ふたつをひとつに」という番組の題も味わい深いものです。バラバラで、相異なると思っていたものが、実は、深いところで繋がっているということを表していたと思い当たります。

　過日、脳梗塞で入院リハビリ中の知人のご住職さんから届いた言葉です。

　「この梗塞で、人間の不思議さ何でもないことの有り難さを気づかされました。
　元気だからという、当り前の警鐘かと思います。」

　私は私、あなたはあなた、どこまで行っても平行線だと思っていたが、よくよく気づかされると、私とあなた、私と仏さまは、私とあらゆるものは、深いところで繋がっていたと、私とあなた、私と仏さまは、私とあらゆるものは、深いところで繋がっていたと、私とあなた、私と仏さまは、私とあらゆるものは、深いところで繋がっていたと、私とあなた、私と仏さまは、私とあらゆるものは、深いところで繋がっているということを表していたと思い当たります。

　「倒れる」からこそ、「歩ける」という言葉の根っこにある、「ふたつをひとつに」という番組の題も味わい深いものです。バラバラで、相異なると思っていたものが、実は、深いところで繋がっているということを表していたと思い当たります。

　森さんは、

　「ロボコンと普通の授業と合わせて「二元性一元」。大学の知識の授業と、それから体を動かす知恵を育てる授業と、この正反対の二つが一つになって仏教の理念にかなっている、とこういうことです。」

　と言います。また、森さんは、人から、お前は、ロボットもやるけど、仏教もやってる、いったい「どっち」なんだと聞かれることがあると、次のように答えるそうです。

　「皆さんどうも「どっち」というものを、本屋の棚のように思っていらっしゃる。ここがコンピュータの本、ここが仏教の本、ここが料理の本、というふうに思われる。そうすると、「ロボット」と「仏教」というふうに、こういうふうになる。ところが僕みたいなのは、全部仏教だと思っているから、仏教の中におるわけですよ。
　仏教が説くのは、あれお釈迦さんのイデオロギーじゃないわけですから、仏教って。
　あれはお釈迦さんが発見された「天地の道理・真理」ですからね。あらゆるものがそこに入っちゃってる。
　つまり孫悟空だったかな、どこから見てもいつもお釈迦様の手の平の上に載っかって出られないと。あれと一緒でロボットもこの中に入っているわけですよ。」

●頭だけでない、身体だけでない

　ロボコンに参加したある学生の作文です。

　苦しく楽しかったロボコンも、あっという間に過ぎ去ってしまった。
　僕は、機械というものは、
　必ず動いて人間の役に立つものだと思っていた。
　動かない機械は、役に立たないので、お払い箱にしていた。
　しかし、このロボコンを通して、機械が好きになった。
　動かない物なら動かせばいい。役に立たないなら、
　役に立てるようにしてやろう、という考えをするようになった。
　今回の事を通して、僕は機械を愛する心とすばらしさを学んだ。
　これからまた多くの人を生を通して、機械と知り合うかもしれない。
　その時その機械をうまく使えば、よごれている空気、水、大気、大地、を
　浄化出来るかもしれない。

　　森さんは示しています。

「苦しく楽しかったロボコンも」
　正反対が二つあるでしょう。楽しいだけではダメなんです。苦しいだけでもダメなんですよ。苦しくて楽しいならいい。
「苦しく楽しかったロボコンも、あっという間に過ぎ去ってしまった」
　このアッという間にというのが集中している証拠。
「僕は、機械というものは、必ず動いて人間の役に立つものだと思っていた。動かない機械は、役に立たないので、お払い箱にしていた。しかし、このロボコンを通して、機械が好きになった。動かない物なら動かせばいい」
　これ仏さんの心。
「役に立たないなら、役に立てるようにしてやろう、という考えをするようになった」
　仏教で言いますよね。役に立たないもの、この世の中に出てこないって。なんうかの意義があって出てくるんだから、その意義を生かすと。三草二木の教えにぴったり。そうすると、目が開いてくる。結局「今回の事を通して」
　今回の事とは、ロボコンですよ。
「僕は「機械を愛する心とすばらしさ」を学んだ。これからまた多くの人生を通して、機械と知り合うかもしれない。その時その機械をうまく使えば、よごれている空気、水、大気、大地、を浄化出来るかもしれない」
　エコ（環境問題）の話まで出てきた。

　学んだことは、実際に身体を動かして、なるほどとうなずけるものなんですね。ところで、今回、この原稿をまとめている時、たまたま、雪山隆弘さんの「お茶の間説法」（百草苑）をクルジロイに手にしました。すると、「行動にうつしてチエ（智慧）がつく」という言葉が出てきました。

　深いところで、仏さまの言葉、仏さまの活き活きした「いのち」はつながっていると感じました。（雪山隆弘さんのお話しは、YouTubeで見ることが出来ます。）

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で「親鸞様-御和讃」を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で「親鸞様-御手紙」を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。